

みづゑの側面觀

AWA 成 節 生

私は五月の新國民なる雜誌で左の記事を見た。

みづゑ。本誌は水彩畫専門の雜誌也、斯道の名流大下藤次郎氏が多年異常なる熱心によりて經營せし者なるが、氏没後尙氏の門下及び知人によりて繼續刊行せらるゝは喜ぶべきこと也。一卷を擧げて水彩畫の描法及び之に關する興味多き話説を録し、三色版、寫眞版、コロタイプ等に印刷せる名家の作を掲げて初學の範たらしむるなど、後進の指導を念とする本誌の用意を窺ふ可し。水彩畫に志ある人は須らく就て學ぶ所あれ。

と、こゝに録して同好者に示し、あはせて「みづゑ」の發展を祈るのである。

水彩畫熟寫生紀行

大阪 T 生

もう五分も後れやうものなら取残されやうと云ふきわどい所へやつと駈けつけると、續いて先生が來られる。おめずらしい、今日は洋服に烏打帽、油のスケッチ箱、片手に三脚と傘御持參で靜かにあらはれる。皆脱帽、一寸頭の競技會、別にふるつた頭もなかつたが、H君のおしやか様、M君の六甲山、やゝ異彩

をはなつ、T君のライオン逸して影なき事久し。

豫定に遅るゝ何分か、ボーと電車は北に向つて走る。途中先生が居られるので皆々猫をかぶつておとなしい、やがて箕面につく。ぞろ／＼と出た一行、探檢家然たる先生を先きに瀧路にそつて上る、瀧前で休んで更に上る事數町、瀧壺にそゞく流れて寫生ときまる。まつさきに先生が初められる、其附近の小さい場處をこゝかしこと、岩の上を飛んだり越したり一としきり騒ぎが有つて、皆それ／＼落ついて靜まりかへる。特別念入りでひまのかゝる事甚だしい。そうと皆の様子をのぞいて見ると、皆々熱心に所謂無我の境、中でも勉強家のE君や、君Hの筆は盛んに走る、殊にE君の岩や流れはお手のもの、お作も見事なのだ、反對のツボラ組では釣好きのA君、手早く一枚片づけると、わざと残した辨當の残りをゑさに、ガーセの絲で野生の竹を竿に岩陰にかくれて大公望をきめこむ。色の白いT君、人の繪ばかり見ではこんな所は柄にないと一枚も筆をつけず、無邪氣に岩の上を飛びまわる、後で聞いたら下駄が無慘だつたとは見かけによらぬ呑氣なお方也。こんな間に先生は傑作二枚を得られる、さすがはと目鏡越しに光る圓熟したお顔を拜して一寸恐縮。

暫時休んで後、一里餘の山路を勝尾寺迄參る。茶店で藥屋になりすまして、お茶やサイダーの一杯氣嫌で元氣よく元來た道を歸る。とかくA君が後れ勝ち也。コンパスが短かいからだとは誰やらの蔭口ばかりでもない様子、都育ちのなれぬ山路には一